

日本プロテオーム学会 (2018年～2020年理事)

2020年 第二回理事会 資料

開催日時：2020年10月24日(土) 9:00～10:30

会場：Zoom 会議

出席者(50音順, 敬称略)

石濱泰、榊原陽一、松本雅記、堂前直、紀藤圭治、奥田修二郎、植田幸嗣、大槻純男、小松節子、杉山直幸、足立淳、久保田一石、梶裕之、川島祐介、河野信、肥後大輔、木村弥生、高尾敏文、川村猛、小田吉哉、荒木令江、小迫英尊、近藤格、

欠席者：本田一文、曾川一幸

【報告事項】

1. 会員状況(松本)

- (1) 会員数(2020年9月28日現在)について報告がなされた(詳細は下表を参照)。今年度の年会費は現在徴収中のため、会費支払いにもとづいた会員数ではない。

種別	会員数
個人会員	個人会員 567名(個人会員:448名 ^{※1} , 個人会員(法人登録):119名) (昨年:619名、一昨年:608名、本年度新規入会者:58名)
学生会員	287名(199名 ^{※2}) (昨年:284名、一昨年:269名、本年度新規入会者:0名)
法人会員	14社(昨年 14社、一昨年 10社)
合計	854名+14社(昨年:903名+14社)

※1 2017-2019年度会費未払い者419名を除く

※2 メール不達者除外

2. JPrOS2020 大会について(紀藤)(資料1参照)

- (1) 2020年大会の中止を判断した経緯と、その事後対応について、報告がなされた。
(2) 準備費およびキャンセル料などの収支についても、あわせて報告がなされた。

3. JPrOS2021大会準備状況報告(小迫)

- (1) 開催場所(徳島大学、大塚講堂・藤井記念ホール)・期間(7月20日・21日)などの開催概要について報告がなされた。
(2) 現時点での大会組織委員(小迫英尊(徳島大学)、足立淳(医薬基盤・健康・栄養研究所)、杉山直幸(京都大学)、川島祐介(かずさDNA研究所)、立川正憲(徳島大学)、吉川治孝(徳島大学))についても、あわせて報告がなされた。
(3) 開催形式として現地開催とオンラインのハイブリッド形式で行うこと、先端酵素学研究所共同利用共同研究事業とトランスオミクス拠点ネットワーク形成事業との共催で開催すること、招待講演として津本浩平(東京大学)を予定していること、今後、大会ホームページおよび学会通信にて学会員などに周知する予定であること、などが報告された。

4. 日本学術会議協力学術研究団体への登録(梶)(資料2参照)

- (1) 申請に必要な書類の準備が整いつつあり、今後準備が完了し次第申請する予定であることが、報告された。

5. 学会年会費徴収システムについて(松本)

- (1) クレジット決済による納入システムを導入し、10月より会費納入が開始されたことが報告された。クレジット決済のメリットとして、複数会員の会費がまとめて学会口座に入金されることから、会計事務所による会計処理経費の削減につながることを、あわせて報告された。

6. 日本プロテオーム学会賞等受賞者(梶)

- (1) 学会賞、奨励賞、研究開発功績賞について、推薦にもとづき学会賞選考委員会による審査が行われた。その結果、以下のように決まったことが報告された。

① 学会賞(選考委員長:梶裕之)

- 小寺 義男(北里大学)

「血漿ペプチドーム分析法の開発と新規生理活性ペプチド探索への応用」

② 奨励賞(選考委員長:梶裕之)

- 阿部 雄一(愛知県がんセンター研究所)

「患者由来試料を用いたリン酸化プロテオーム解析手法の開発と胃がん生検試料への応用」

- 松本 俊英(北里大学)

「プロテオミクスによる卵巣明細胞癌の新規バイオマーカーLEFTYの同定とその機能解析」

③ 研究開発功績賞(選考委員長:梶裕之)

- 東ソー株式会社卵巣癌診断薬開発チーム(代表:大竹則久)

「プロテオミクスで発見した新規卵巣癌マーカーTFPI2に対する臨床検査薬の開発」

7. KHUPO との交換講演(石濱)

- (1) 2010年から続いている交換講演について、これまでの交換講演者リストと費用負担などの概略が説明された。2020年のKHUPOは開催が中止となったが、2021年は開催する予定であることが、あわせて報告された。

① 講演者は派遣元学会が推薦する。

② 派遣先学会の負担は参加費のみ(講演者への謝金あり)。

③ JHUPOからの招待では、講演者への謝金の代わりに、航空券、ホテル代を直接負担する(年会ではなく学会が負担)。

④ 2010年から2019年の交換講演者リスト。

2010年 KHUPO 山本 格、木下英司

2010年 JHUPO Ho Jeong Kwon (KHUPO 会長)

2011年 KHUPO 平野 久

2011年 JHUPO Je Kyung Seong (Seoul National Univ), Kang-Sik Park (Kung Hee Univ)

2012年 KHUPO 山田 哲司

2012年 JHUPO Kwang Pyo Kim (Konkuk University)

- 2013年 KHUPO 朝長 毅
- 2013年 JHUPO KHUPO7名の HUPO2013によるサポートで対応
- 2014年 KHUPO 近藤 格(KHUPO 側からの推薦)
- 2014年 JHUPO Byoung Chul Park (Korea Res. Inst. of Biosci. & Biotechnol.)
- 2015年 KHUPO 荒木令江
- 2015年 JHUPO Bonghee Lee (Gachon University)
- 2016年 KHUPO 小松節子, 野呂 絵里花
- 2016年 JHUPO Kwang Pyo Kim
- 2017年 KHUPO 服部成介, 野村文夫
- 2017年 JHUPO Cheolju Lee
- 2018年 KHUPO 石濱泰
- 2018年 JHUPO Jo-Yoel Cho
- 2019年 KHUPO 大槻純男、太田信哉
- 2019年 JHUPO Jinhwan Eugene Lee
- 2020年 KHUPO 奥田修二郎、紀藤圭治、松本雅記 (中止)
- 2020年 JHUPO 中止

8. HUPO, AOHUPO 活動報告(石濱)

- (1) HUPO CONNECT202 (2020/10/19-10/22)では、約 1000 人が参加し 200 人くらいが常時アクセスしており、日本からは 30 名ほどが参加していたことが報告された。開催時間がヨーロッパおよび米国の時間に合わせられていたため、アジア圏にとっては、時差の問題もあった。
- (2) 山本格先生(新潟大学)が、HUPO より Clinical and Translational Proteomics Award を受賞されたことが報告された。
- (3) HUPO 理事選挙では、韓国から 1 名、台湾から 1 名とアジア圏での当選者が少なく、オーストラリアや、2023 年大会開催予定のインドからの選出者が多かったことが、報告された。
- (4) 10th AOHUPO Congress (韓国・釜山)は、2020 年開催予定の大会が中止となったことに伴い、2021 年 6 月 30 日～7 月 2 日に開催時期が延期されたことが報告された。現地開催とオンラインのハイブリッド形式での開催が予定されていることも、あわせて報告された。また、次期理事会においては、日本からの参加を促してほしいとの要望がなされた。
- (5) 2021 年 HUPO 大会(ストックホルム)は、3 月に開催可否が決まる予定であることが報告された。

9. JPrOS イニシアチブについて

- (1) プロテオームデータベースイニシアチブ (石濱)
 - ① JST ライフサイエンスデータベース統合推進事業統合化推進プログラム「プロテオームデータベースの機能深化と連携基盤強化」プロジェクトとして、2018 年から推進していること、また、コロナ関連専用のデータベースの構築を開始したことが報告された。
- (2) データジャーナル Journal of Proteome Data and Methods (JPDM)について(河野)
 - ① 2020 年 6 月に総説論文を 1 報掲載したことが報告された。
 - ② 科研費(研究公開促進費)への申請は継続する予定であることが報告された。

10. 各担当理事からの活動報告

- (1) 学会誌(Proteome letters)編集活動 (小迫、大槻)(資料 3 参照)
 - ① 2020 年の 1 号と 2 号の掲載内容などについて説明がなされた。

- ② 引き続き、執筆者の確保が今後の大きな課題であり、あらためて執筆者の推薦が依頼された。
- (2) 学術企画活動（植田）(資料4参照)
 - ① 分子生物学会でのワークショップ企画「プロテオミクスを基盤とするデータベースの進化と生命科学研究への横断的活用」(12月4日、オンライン開催)について、説明がなされた。今後も、JPrOSに関わる方の国内主要学会(生化学会・分子生物学会など)での成果発表の場として、同様の企画を継続していくことが、あわせて報告された。
- (3) 教育活動（曾川）
 - ① COVID-19の影響により5月に予定されていたトレーニングコースは延期とし、11月での開催を検討していたが、開催予定のかずさDNA研究所では十分な感染対策が難しいといった状況があり、2020年度は中止となったことが報告された。
 - ② 今後は、動画録画資料を学会ホームページに掲載するなど、以前とは異なる実施形態について意見交換がなされた。
- (4) 国際活動（小松、近藤）
 - ① 報告事項無し。
- (5) 広報活動（奥田／河野）
 - ① 2019年大会の学会要旨が、10月25日にJ-STAGEに公開される予定であることが報告された。
 - ② 今後の課題として、学会ホームページでのProteome Letters関連情報の更新や、掲載論文をJ-STAGEから学会ホームページにアップデートできる連携システムの構築について、問題提起と意見交換がなされた。

8. 2019-2020年度主催・後援・協賛実績（石濱）

- (1) 該当事項無し。

【審議事項】

1. 2019年度収支決算報告および2020年度予算案（木村）

- (1) 次頁以降の2019年度収支決算書・貸借対照表、および2020年度予算案にもとづき説明がなされた。2019年度収支決算書・貸借対照表については、あわせて監査報告もなされた。理事会での承認を受け、その後の総会での承認後に決定されることとなる。

【2019年度 一般会計収支決算書】

2019年4月1日～
2020年3月31日

経常収益(収入) 14,537,247円

《内訳》

受取会費	1,372,002円
（個人会員）	622,002円
（法人会員）	750,000円
事業収益（2018年大会）	10,738,615円
（参加料）	2,459,000円
（広告料）	1,126,000円
（展示料）	5,350,615円
（懇親会費）	723,000円
（ランチョンセミナー）	1,080,000円
（イブニングセミナー）	0円
受取補助金等	2,400,000円
受取寄付金	10,000円
雑収益	16,630円
（利息）	130円
（雑収益）	16,500円

経常費用(支出) 12,783,463円

《内訳》

事業費（2018年大会）	11,554,199円
（会議費）	71,000円
（懇親会費）	2,936,064円
（旅費交通費）	680,099円
（通信運搬費）	163,844円
（消耗品費）	105,392円
（賃借料）	4,307,008円
（諸謝金）	0円
（支払手数料）	85,720円
（委託費）	3,095,616円
（雑費）	109,456円
管理費	1,229,264円
（通信運搬費）	0円
（消耗品費）	1,500円
（印刷製本費）	369,570円
（賃借料：WebEX会議システム利用料）	0円
（諸謝金）	0円
（支払手数料）	58,884円
（委託費）	620,000円
－ Web運営維持管理費	135,650円
－ 会計事務	484,350円
（雑費）	179,310円

2019年度 正味財産増減額；1,415,867円

➢税引前正味財産増減額(経常収益 - 経常費用)：1,753,784円

➢法人税、住民税及び事業税；337,917円

正味財産合計(純資産) **11,618,336円** (2020年度繰越金)

➢2018年度 繰越金(10,202,469円) + 2019年度 正味財産増減額(1,415,867円)

【貸借対照表】

2020年3月31日現在

(資産の部)

資産合計	12,042,464円
現金預金	11,858,464円
学会事務局 普通預金	
ゆうちょ銀行(35543261)	11,540,902円
2019年大会事務局 普通預金	
ゆうちょ銀行(01404871)	2,000円
宮崎銀行	0円
2020年大会事務局 普通預金	
ゆうちょ銀行(55997051)	315,562円
2019年大会 前払金	184,000円

(負債の部)


負債合計	424,128円
2020年大会 前受金	0円
前受会費	50,000円
未払費用(4月に支払う会計事務所費3月分)	27,500円
預り金(1~3月に支払った源泉徴収税)	8,728円
未払法人税等	337,900円

資産合計 — 負債合計 = **11,618,336円** (正味財産合計)

令和元年度（2019年度）会計監査報告書

日本プロテオーム学会の令和元年度（2019年度）の収支決算
について監査を実施した結果、正確であることを認めます。

令和2年 08月 12日


会計監査 小田 吉哉 

会計監査 _____ 印

令和元年度（2019年度）会計監査報告書

日本プロテオーム学会の令和元年度（2019年度）の収支決算
について監査を実施した結果、正確であることを認めます。

令和2年 8月 12日

会計監査 高尾 敏文 

会計監査 _____ 印

【令和2年度（2020年度）予算(案)】

収入	12,978,436 円
《 内訳 》	
2019 年度繰越金	11,618,336 円
受取会費	
(個人会員)	600,000 円
(法人会員)	750,000 円
事業収益	
(2020 年大会開催収入)	0 円
受取寄付金	0 円
雑収益	
(利息)	100 円
(雑収益)	10,000 円
支出	12,978,436 円
《 内訳 》	
事業費	
(2020 年大会開催経費)	968,352 円
管理費	
(通信運搬費)	15,000 円
(消耗品費)	15,000 円
(印刷製本費)	300,000 円
(賃借料：WebEX 会議システム利用料)	0 円
(諸謝金)	30,000 円
(支払手数料)	10,000 円
(委託費)	
— Web 運営維持管理費	250,000 円
— 会計事務	500,000 円
(雑費)	
— 学会賞、トラベルアワード関連	300,000 円
税金	370,000 円
予備費 (2020 年度繰越金)	10,220,084 円

2. 2021 年大会及び 2022 年大会（石濱）

- (1) 2021 年第大会は徳島で開催されることとなっており、小迫理事を中心に準備を進めて行くことが報告された。
- (2) 2022 年大会は JPrOS の 20 周年記念大会となるが、次期理事会にて開催場所および大会長の検討を進めていくことが申し送り事項として報告された。

参考資料: JHUPO 大会、日本プロテオーム学会年会 (JHUPO 大会) 開催地及び大会長

年	開催地／大会長
2003	第1回 つくば／中西洋志
2004	第2回 東京／戸田年総
2005	第3回 横浜／平野 久
2006	第4回 東京／西村俊秀
2007	第5回 東京／磯邊俊明
2008	第6回 大阪／高尾敏文
2009	第7回 東京／前田忠計
2010	第8回 千葉／山田哲司
2011	第9回 新潟／山本 格
2012	第10回 東京／高橋信弘
2013	第11回 (HUPOと合同) 横浜／平野 久
2014	第12回 つくば／成松 久
2015	第13回 熊本／荒木令江
2016	第14回 東京／服部成介
2017	第15回 大阪／朝長 毅 7/26-28, ホテル阪急エキスポパーク
2018	第16回 大阪／石濱 泰 (第66回質量分析総合討論会(日本質量分析学会の年次大会)と第9回AOHUPOとの合同大会) 2018.5.15-18, ホテル阪急エキスポパーク
2019	第17回 宮崎／榊原陽一、松本雅記、大槻純男 2019.7.24-27
2020	第18回 東京／紀藤圭治、堂前直、川村猛 (中止)
2021	第19回 徳島／小迫英尊

3. HUPO、KHUPO および AOHUPO に関して、以下の事項が報告または提案され承認された(石濱)。

- (1) 石濱会長が 20 周年記念として Molecular & Cellular Proteomics (MCP) に記事を投稿予定であり、学会からの掲載費のサポートが提案され承認された。2021 年度から MCP が Open Journal となり、掲載料は Article で \$2,000 (約 20 万円) となる予定である。
- (2) AOHUPO には事務局がなく、学会収益は開催国での学会事務局で運用している。そうした状況を踏まえ、次回の AOHUPO に前回開催時(2018 年)の収益をもとに JHUPO からサポートすることが提案され、承認された。

4. 次期理事選挙について(石濱)。

- (1) 2021 年 1 月から次期理事会を発足させる必要があること、また、2021 年 3 月までは引継ぎ機関とすることが、再確認された。
- (2) 次期理事選挙の日程として、11 月末から 12 月初旬にかけて投票を実施し、12 月末までに次期理事を公表する予定であることが、報告された。

5. 名誉会員について(松本)。

- (1) 前回の理事会からの継続検討課題である名誉会員の選出について、今期の理事会で 2 名ほどを目安として推薦する方向が確認された。

6. その他(石濱、松本、木村)。

- (1) 今後の学会運営として、会計の安定性は今後安定した学会運営を継続していくために欠かせないであろうこと、日本学術会議協力学術研究団体への登録は、今後の学会の再編成・統合などが進む状況のなかで存続していくための 1 つの手段になり得るだろうこと、について話がなされた。
- (2) 今期の理事会運営に関して、以下の話がなされた。

- ① 理事業務のなかでも、学会誌関連の業務負担が大きかったのではないだろうか。本来ならば出版社がやるべき仕事を、編集長が行っているなど事務作業量が非常に多い状況であり、今後は担当理事を増やすなど、対策が必要だろう。
- ② 庶務担当は今期から3名体制とし、業務を明確に分割することで、負担軽減と円滑な業務履行が可能となった。
- ③ 会計業務としては、とくに年大会の会計処理とその会計事務所との情報共有にかなり労力を要しており、今後の対策が必要だろう。また、会計担当理事の正副両担当間で、円滑に業務の引継ぎを行うことが大切だろう。
- ④ 学会と年大会との情報交換を円滑に遂行するために、年大会長が特例として理事に任命することを今後検討する必要があるだろう。